山口県柳井の町屋, 小田家住宅と『小田家文書』

屋敷の変遷と小屋組の架構形式に関する建築史的研究

ODA TOWN HOUSE AND ODA ARCHIVES IN YANAI, YAMAGUCHI

The building story and the development of the roof structure

生田 光晴*, 堀 賀貴**

Mitsuharu IKUTA and Yoshiki HORI

A new survey of the house and documentary research into Oda archives forms the basis for analysis of the building story and for a reconstruction of the original roof structure. Oda house, which has belonged to the mid-Edo period, is firmly dated to 1753 and the survey reveals four different phases of the building through its extension of the premise. Noboribari-beam type, which is not observed in Kunimori house built just after 1768, may go back to the original house, even if it was reconstructed in a later phase.

Keywords : Yanai, Town house, Oda-house, Oda-Archives, Kunimori-house

Gable side entrance, Noboribari-beam type

柳井, 町家, 小田家住宅, 小田家文書, 国森家住宅, 妻入, 登り梁形式

はじめに

江戸期における、瀬戸内海沿岸地域の港町に現存する町家遺構には、妻入形式や外部意匠に代表される共通した地域の特徴もつが、特に伝統的建造物群保存地区に選定されている竹原や柳井、御手洗をはじめ、室積や宇和などにはこうした特徴が顕著である。これらの在町が残す町並みは、地方間での技法に若干の差異をもちながらも、妻入という共通する特徴をもっていたため、これまで一体的に取り扱われてきた¹⁾。こうした地域に横たわる、地方間の異同を細分化していくなかで、その指向性を明らかにしていくことは、今後の住居史研究における課題といえよう。

谷沢明氏は著書『瀬戸内の町並み』²⁾において、対象を瀬戸内海沿岸の港町に限定し、文献資料と自身による実測調査からそれぞれの町並みの成立を論じており、瀬戸内地域という視点を実践的な方法で捉えなおした研究として評価される。一方で、大場修氏による近畿の町家遺構を網羅的に取り扱った一連の研究³⁾では、架構形式などの技法的な視点からその指向性を読みとり、町家の成立にまで遡る議論を展開させており、特に在町などに見られる町家形式には、妻入形式などにみる特徴を農家などの在来形式と捉えているが⁴⁾、瀬戸内沿岸地域に限ると、こうした形式の成立時期及び編年などの実体は明らかにされていない。

瀬戸内地方における近世の町家に関して、遺構による編年的な方法

を用いて類型を検討する際に、現存する遺構数は限られていることもあるため⁵⁾、各地方の最古級の町家から編年を行うことになるが、本稿で扱う柳井周辺において、最古の民家形式を伝える例は国指定重要文化財の国森家住宅⁶⁾がある。国森家住宅は明和5年(1768)の大火直後という正確な創建年代と、その保存状況の良さから、柳井の町家史を知る上で貴重な資料を提供し、柳井市史や報告書などの文献において⁷⁾、その代表的な町家とみなされてきたが、資料の重要性と典型としての位置付けは分けて考える必要があり、小田家住宅が、文書資料の充実や保存状況などから、柳井地方における町家の成立と発展を知る

写真-1. 小田家住宅外観

* 山口大学大学院理工学研究科
** 山口大学工学部感性デザイン工学科
助教授・博士(工学), M. Phil

Graduate School of Science and Engineering, Yamaguchi Univ.
Assoc. Prof., Dept. of Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng. and
M. Phil (Univ. of Manchester)

上で格好の題材となりうることが判明した。

山口県指定有形民俗文化財の小田家住宅⁹⁾は、国森家住宅と並び柳井における江戸中期頃の町家として位置づけられていたが⁹⁾、正確な建築年や創建時から現状に至るまでの主屋の平面、小屋組の架構形式及び、屋敷の変遷は不明な点が残されたままであった。特に主屋の建築年についてはおおよその時期確定はされているものの、正確な年代については文献により若干の違いも見うけられる。

本稿では、居宅の実測調査を行った際に整理した、文書、主屋、屋敷、町割などの古図資料から、現在の主屋の建築年の時期確定と屋敷の史変遷を総括し、その成立期における町家形式の様子と展開を明らかにした。このような、江戸中期から現在に至るまでの変遷を辿ることのできる町家遺構は、西日本においても数少なく¹⁰⁾、近世の町家の実体を知る上で、歴史的に重要な遺構であるみなされ、さらに登り梁形式の小屋組架構に着目することにより、瀬戸内沿岸の妻入町家の架構形式の編年に位置づけることを目標とした。

図-1. 小田家現状屋敷配置図

以下、まず屋敷および主屋についての実測調査に基づいて、平面構成、構造形式の現状を理解する(第1章)。次に、小田家住宅における先行研究を参照にしながら主屋の創建年代に関する問題点を抽出した上で、今回資料として加えられた地割図を照合し、新たな知見を加える(第2章)。最後に、以上を踏まえ、現存する居宅部分と屋敷に関する古図を年代順に整理し、主屋の発展の編年と、屋敷の拡大の様子について明らかにする(第3章)。

1. 小田家住宅の現状

1-1. 屋敷

現在の小田家の屋敷には、主屋をはじめとする11棟の建物が残されている。主屋の西隣には、道路から中庭をはさんで十畳と十二畳の座敷が別棟であり、主屋の南側にも、台所や風呂、便所などの付属屋が建つ。その南奥には本蔵、勘定蔵、米蔵、などの土蔵が建ち並び、以前には、本蔵の南側にも土蔵が建てられていたと伝えられる¹¹⁾。屋敷の南の入口には長屋門を構え、長屋門をくぐると、「半閑舎」と呼ばれる離れ座敷が建つ。半閑舎は、岩国藩主吉川公が柳井来訪の折、止宿したところと伝えられ、その他文人墨客などが訪れた際にも、ここを宿所としたようである。屋敷には、このほかの付属舎もみられ、道具小屋、味噌醤油屋、中間部屋、旧馬屋がそれぞれ一棟を構えている。また、東側の木地屋小路に面する敷地に建つ、2戸続きの長屋は借家であったが、現在では屋敷内に取り込まれている。

1-2. 居宅一平面

表側の全間口は13.67m(1間=6尺5寸換算で約7間)であるが、主屋部分と増築座敷部分に分けると、主屋部分8.39m(約4間2尺)に西側座敷部分5.277m(約2間4尺)、それに対し奥行17.95m(約60尺)で、主屋の間口に対し奥行きが倍以上の深さをもつ。建物は西側座敷を除く主屋に全面二階が設けられている。主屋の一階平面は、大戸口から入った東片側を、裏庭まで通りぬけるトオリニワに沿って表側から奥行き方向に、ミセ、ヨコザ、ナカノマ、オクノマ、と続く一列型の間取りの西側に座敷が増築されている。二階へは、大戸口側のトオリニワにある階段と、ナカノマの奥にある隠し階段から通ずる。二階へ上がると、オクノマ座敷の上に当たる部分に畳を入れ、八畳の居室

図-2. 小田家現状一階平面図

図-3. 小田家現状二階平面図

This is a detailed architectural floor plan of a large, rectangular building. The plan is oriented with a long horizontal corridor running through the center. On the left side of this corridor, there is a large room labeled 'HALL' at the top, followed by several smaller rooms and a large room labeled 'CLASS ROOM' at the bottom. On the right side of the corridor, there is a large room labeled 'HALL' at the top, followed by several smaller rooms and a large room labeled 'CLASS ROOM' at the bottom. The plan also shows a series of rooms along the top and bottom edges, including a 'KITCHEN' and a 'DINING ROOM'. The drawing is a detailed line drawing with labels for various rooms and areas.

Figure 1-1-1 is a detailed architectural cross-section of a traditional Chinese building. The drawing shows the internal structure, including the roof, walls, and floor. The building is symmetrical, with a central entrance and two side wings. The roof is a multi-tiered structure with a central ridge and side ridges. The walls are thick and made of brick or stone. The floor is made of wood. The drawing is labeled with dimensions and structural elements. The dimensions are given in meters (m) and feet (ft). The structural elements are labeled in Chinese characters.

4.00 2.00

2F

Genji

Kamado

Yozakura

Nand

NII-Electronic Library Service

整理の中で改めて詳述する。

2. 先行研究と問題の所在

2-1. 主屋の建築年を巡る2説（元禄14年説と宝暦3年説）

これまでに主屋の建築年を確定する説については、元禄14年（1701）説と宝暦3年（1753）説の2説が提示されており、それ以降の小田家住宅を扱った文献は、その2説のいずれかを根拠としている。

元禄14年説は、鈴木充氏によって昭和47年度民家緊急調査報告の『山口県の民家』²¹⁾で示されたのが最初である。本説を確定した理由としては、(i)「元禄十四年三月十日上棟」の銘がある棟札が発見されたと言われていること²²⁾、(ii)材の古さからみて、(iii)享保、延享などの祈祷札が多数発見されたこと、の3点が上げられる。他方、小山良昌は、その3点を考慮した上で、さらに小田家文書にある土地購入に関する記録が示す土地間口と現状が一致し、普請願書²³⁾にも「本家普請宝暦二年壬申十二月五日より初ちようの初仕り、明ル三年西ノ正月五日より初メ同年三月二十七日棟上ケ仕候」とあることから、主屋の建築年を宝暦3年（1753）と確定している²⁴⁾。両説を比較すると前説には不確定な要素が多いのに比べ、後説は基礎資料の充実とその考証さが信憑性を高めている。

そこで以下において、小山説の根拠や論証を示した上で、主屋の建築年の再検討を行う。

2-2. 屋敷地の変遷

小山氏は文書から土地購入に関する記録を整理し、土地間口の変遷を追ったが、本稿ではそれらの資料に、古図を重ね合わせることで主屋の建築年の時期を確定する。

宝暦3年説の根拠でもある『居宅永代券状写、文久元年（1861）』（表1）から、現在の規模にいたる4回の敷地の拡大が小山によってすでに明らかになっているが、さらに今回新たに整理された『地割図（金屋町33～35番地付近）、嘉永6（1853）』²⁵⁾と照合すると、表中（3）、（4）が、敷地拡大の時期と対応することが判明した。現状の主屋の間口幅は4間2尺であり、（1）～（3）の間口の合計から4間4尺5寸から脇の水路分を含めるとほぼ一致することがわかる。従って、（4）が西側座敷部分に相当し（1）～（3）が主屋部分となる²⁶⁾。このことから、現状の主屋部分は、宝暦元年（1751）に購入した（3）の敷地を含んでいるため、主屋は少なくとも宝暦元年以降の建築であることが明らかとなり、普請願書の記録も考慮に入れると、現状と同規模の主屋は宝暦3年創建と判断することが可能となる。

次に、実測調査と古図の解釈から宝暦3年建設後の主屋の変遷をさかのぼり、宝暦3年当時の主屋が復原される可能性について考察する。

表-1. 『居宅永代券状写』による小田家土地間口換算表
文久元年（1861）、1間＝6尺5寸換算

1	元禄5年（1692）10月17日	合計間口	
	金屋町下小路 池田屋善兵衛 1貫550目 2間5尺	2間5尺	
2	元文元年（1736）9月24日		
	金屋町下小路 貞屋新五郎 200目 4尺5寸	3間3尺	
3	宝暦元年（1751）12月25日		
	金屋町下小路 木地屋新五郎 1貫目 8尺	4間4尺5寸	
4	宝暦8年（1758）12月21日		
	金屋町下小路 開作屋市兵衛 500目 2間半	7間7寸5分

図-10. 『地割図（金屋町33～35番地付近）、嘉永6（1853）』
山口文書館所蔵、図中（1）～（4）は表1に対応し、年代の枠は筆者。

3. 小田家文書

3-1. 古図資料の整理

小田家に所蔵されている屋敷及び主屋に関する古図は、合計で11枚の9種類（2種は2枚組）確認できた。これらのうち正確な年代が記されているものは寛政9年（1795）の『吉川公来泊警備図』、文政7年（1824）の『屋敷図』、天保6年（1835）の『家相図』の3枚のみで、その他は年代不詳なため、今回の調査でこれらの古図を解読し、新旧関係を整理した（表-2）。古図の内容を年代の古い順に整理すると図7（①）～15（⑨）のようになり、大別すると、主屋を中心に描かれた図（①～④）と、拡張された屋敷が描かれた図（⑤～⑨）とに分類され、西側座敷の増築前後で2グループに分けて整理できる。従って、①～④は主屋創建時から寛政9年以前、⑤～⑨は寛政9年以降のものとなる。

そこで、以下、西側座敷の増築以前と以後で、議論を進めたい。なお、各古図の名称は、筆者が内容から判断し名付けるものとする。

3-1-1. 西側座敷増築以前の古図（4種類）

①～④は、いずれも描かれた正確な年代は不明であるため、各図の内容から作成された時代の前後関係を導いた。図中の①～③は指図で、①、②は小屋組図と二階床組図の2種類からなり、④は間取りを記録した図となっている。②～④では、いずれも書き込みから建物間口幅が読みとれ、概ね4間2尺の幅をもつことがわかる。①については番付の文字しか記されていないが、後述するように、②は①を変更した図ということが判明し、①、②間で敷地を拡張したとは考えにくいことから、①も他の図と同様4間2尺と推測される。これらを、前章で整理した屋敷間口の大きさとの対応を考えると、宝暦元年から西側座敷を獲得するまでの間のものと限定される。従って、②～④は西側座

敷が描かれている古図のなかで、最も年代の遡る⑤の寛政9年（1795）の『吉川公来泊警備図』の状態となる、約40年間に作成されたものと推測される。

表-2. 小田家の沿革と古図の年代表

西暦	和暦	代/当主	関連事項	古図
1688	元禄元	1/善四郎清次	・柳井に移住	
1692	元禄5		・間口2間5尺購入 (表1-1)	
1734	享保19	2/善四郎宣敬		
1736	元文元		・間口4尺5寸購入 (表1-2)	
1751	宝暦元		・間口8尺購入 (表1-3)	
1752	宝暦2		・普請 “ちやうの初め”	①指図
1753	宝暦3		・主屋棟上	②指図
1758	宝暦8		・間口2間半購入 (表1-3)	③指図
1768	明和5		・明和の大火	④間取図
1769	明和6		・国森家住宅棟上	
1773	安永2	3/善四郎宣照		
1781	天明元	4/六左衛門政太郎		
1795	寛政7			⑤吉川公来泊警備図
1812	文化9	5/六左衛門富太郎		⑥西側座敷計画図
1818	文政元		・西側座敷建替	⑦屋敷図
1824	文政7			⑧方位図
1835	天保6			⑨家相図
1838	天保9			
1850	嘉永3	6/六左衛門伊三郎	・油業を廃業	
1853	嘉永6			地割図（図1）

各図の具体的な内容は以下ようになる。

①指図（年代不明）（図-11）

①は間口、奥行き幅、年代などの書き込みはないため、限られた検討となるが、指図②、③に比べ軸組が簡素であること、土間境筋のナカノマとオクノマの間には現状と異なる通し柱が存在することや、小屋梁が基本的に桁行方向一間毎に両側柱に折置き組で架け渡していることから、最も年代の遡る指図であると推測される。小屋梁の取り合いを見ると、敷梁は通し柱で受けて地棟を渡し、通し柱筋の間の梁は地棟に投げかけられており、両妻面の「た」の材についての取り合いについては不明な点は残されるものの、小屋組の中央部分は「よ」、「か」、「た」の材に「れ」、「に」の材が架け渡されいることから、登り梁形式として見なすことができる（図中A,B,Cの筋が登り梁）。なお、残念ながら、この図の間口幅は記されていないが、②と表に立つ柱位置等が同じであるため、②と同様4間2尺と考えられ、①も宝暦元年～寛政9年の間の状況を招いていると見られる。

②指図（年代不明）（図-12）

②には、表間口の「四間二尺」から、宝暦3年以降の主屋に関する指図であることがわかる。①と比較してみると②-aは、表通り境とトオリニワ座敷境に①-aには見られない部材が確認でき、ザシキの裏庭側に内縁と濡縁、ザシキとトオリニワ境にはヒロシキが描かれている点異なる。また、「地指図但シ朱引を二階の図」の文字から二階が存在していたことがわかる。小屋組の架構方法も①のそれとは大きく異なり、上屋梁の部材数が少なく洗練されているように「表裏入母屋破風造り」とするため、①にあった通柱を抜き小屋組までの全体を検討したものと考えられる。小屋梁は①と同様、一間おきに側柱と対応し架け渡され、登り梁形式がとられているが、

図-11. ①指図

図-12. ②指図

①と異なる材にのみ書き込みが記されていることから、実際の改修が行われたかは不明ではあるが、②は①の小屋組を変更するための指図と判断した。側柱上には桁がのせられナカノマ上部に架け渡す梁の存在から、折置き組から京呂組へと移行されたことが判る。妻面の桁は①-bの3本から「妻下登り牛引物一尺七寸」と記された材1本のみと、構造上の洗練がみられる。①と比べ全体的に合理的な手法を用いていることから、①から②の順序で作成されたと推測される。

③指図（年代不明）（図-13）

③の指図は、現在の主屋の指図であると言われている。③からは「はり行四間二尺、けた行八間半」、「六尺五寸一間の沙汰ニして」と、当時の基準尺も読みとれる²⁷⁾。また小屋組に関して、②と同様「裏表共ニ屋根もや作りニして」とあり、「柱高サ老丈五尺三寸位（約4636mm）」、「下ヨリ二かい板場も老丈三寸（約3121mm）」などの高さも記されている。この側柱と二階板場までの高さを現状と比

較すると（梁行断面図参照）、概ね現状とあてはまる。また、通し柱筋の二階小屋梁も「はり大物四間二尺通りニして」とあり、現状の架構法と一致する。②の指図と異なる点はザシキ廻りの鴨居や柱などの軸部に若干みられるが、間取りに著しい変化は見られない。以上から、③は現在の主屋の指図の可能性が高く、その後、以下に示す小規模な改修が加わっているものの、現状の主屋とほぼ一致する。

図-13. ③指図

④間取図（年代不明）（図-14）

④の間取り図からは一階を中心に、柱、差鴨居の有無とその位置が確認できる。主屋の基本的な間取りの構成は①～③から大きく変化することはないが、この時期になると、ナカノマのトオリニワ側にある框の芯が通し柱と一致しないといった改修の後が読みとれる。また、①～③にはナカノマの奥行き幅は1間半として描かれていたが④では両側柱が1本ずつ足されており、これらの柱は現状と一致している。このことから、④は③をさらに改修したものと考えられる。

また、この図からは西側座敷増築以前の屋敷の構成がわかり、当時は、主屋や付属屋及び本蔵からなる一般的な町屋構成²⁷⁾であったことがうかがえる。

■評価

①～④において、西側座敷以前の主屋の建築時における計画をみることができたが、前述したように、③の指図が現状の主屋の規模、間取りや架構法と類似しており、現在の当主の言い伝えも踏まえると、現状主屋の指図と推測される。④は、現状の主屋と一致する部分が多く見られることから③を部分的に改修した状態と考えられ、①、②は計画図と判断さ

- 一、はり行 四間式R
- 一、けた行 八間半
- 一、六尺五寸一間の沙汰ニして
- 一、はり大物ノつがぬ木ニして
- 一、物持所の柱図の通上々木ニして六寸二八寸ノ柱ニして
- 一、惣廻り柱六寸ニして
- 一、表柱上つがノ木ニして
- 一、座敷廻り上々木ニして
- 一、見せノぢふく随分ニしてつよき木ニして
- 一、大ねだはさみほぞニして
- 一、けた下ヨリ
- 柱高サ老丈五尺三寸位
- 下ヨリ二かい板ばも
- 老丈三寸
- 二かいけた下迄五尺
- 惣二かいニして
- 尤〇印の所二かいなし
- 一、裏表共二屋根も作りニして

図-14. ④間取

れる。

このことから、宝暦3年の棟上げの時点で柳井には登り梁の技術は浸透し、小屋組を検討できるにまで達していたと推測される。

3-1-2. 西側座敷増築以降の古図（5種類）

以下において、古図の整理と実測調査の結果を照合しながら、西側座敷が増築された頃の寛政9年以降から、西側座敷を含めた敷地全体が、ほぼ現状の姿を整えるまでの主屋の改修を追う。

第一章でも触れたように、宝暦元年の主屋西側隣地の買収は明らかだが、実際に座敷を増築した具体的な年代は確定できない。しかし、以上5種類の古図は西側座敷が現状に至るまでの様子を伝えるとともに、屋敷の変遷を辿るうえでも有効な資料となる。なお、⑤、⑦、⑨は、記入されている年代に従って編年を行い、作成年代が記されていない⑥は、図の内容から時期判定を行い位置づけた。

⑤吉川公来泊警備図（寛政9年/1795）（図-15）

この当時、小田家は一般的な商家から士分格となり、領主である吉川公も度々来泊したと伝えられる。

⑤はその時の、吉川公を護衛するために描かれた間取り図とされている²⁹⁾。主屋の間取りに大きい変

化はないが、宝暦8年（1758）の西側隣地購入後の屋敷拡張の様子がわかる。当時の西側座敷の間取りには、坪庭は見られず主屋の座敷との連結部分はミセとナカノマの2カ所に押入の一部をかえた「入口」のみで、主屋との続き間の形式は見られない。規模も裏庭側の縁は「外縁」のみでトコも縁側の座敷のみ、表構えは「表竹垣」など、現状と異なり簡素なつくりであったと推測される。主屋との接合部の様子や独立した便所が設けられていることから、隣地を購入した際にすでに建っていた小規模町家の可能性も考えられる。

屋敷については④の間取り図よりもさらに南奥が描かれており、本蔵の東側に長屋、南側にはもう一つ蔵が建ち、そのさらに南奥には吉川公が投宿されたといわれる半閑舎の間取りも見られる。このように隣地の購入に続く建物の増築といった、18世紀末における小田家の経済的発展³⁰⁾とそれに伴う屋敷の充実がうかがえる。

⑥西側座敷改修図面（寛政9年・～文政元年）（図-16）

⑥には作成年代が記載されていないが、図の内容から、年代の明確な⑤と⑦の図の間に位置づけられる。すなわち、この図の内容は、居

図-15. ⑤吉川公来泊警備図

宅部分のみで屋敷全体は描かれていないことや、西側座敷の畳の線が朱書きで描かれていることから、⑤で仮設的に増築した西側座敷の間取りを変更するための計画図面であると判断できる。現状の座敷と比較すると、坪庭が南奥に半間ずれて配されているため、坪庭の南側に続く座敷2室が主屋のナンドやナカノマの筋と一致していないことがわかる。離れの位置や、斜線がひかれた内縁も検討した様子が見えがえる。

⑦屋敷図（文政7年/1824）（図-17）

この図では、居室部分の間取りは描かれていないが、屋敷内の建物の配置と各棟の梁、桁行の規模が読みとれ、概ね⑦と同様の配置であることがわかる。特記すべきは、西側座敷が「文政元年寅十二月建口」³¹⁾が行われていることがわかり、⑤から、⑥の計画図を経て文政元年（1817）に完全に建て替えられたといえる。

⑧方位図（文政7年～天保6年/1824～1836）（図-18）

家相を見るための方位を入主屋の各居室に「吉」という文字を書き記している。文政元年に建て替えられた、西側座敷の間取りは現状と大差なく、坪庭周りの居室から床、書院の位置まで詳細に読みとれる。⑧と

図-16. ⑥西側座敷改修図面

図-17. ⑦屋敷図

図-18. ⑧方位図

⑨は、建物の間取りにほとんど差異がないことから³²⁾、⑨に改築する以前の間取り図と考えられる。

⑨家相図（天保6年/1835）（図-19）

⑨は半閑舎より南側に異なる図が2種類残されており、本稿では油

図-19. ⑨家相図

絞り場と長屋門を取り壊し、長屋座敷に建て替えた図を掲載した。
⑨の時期には、居宅部分にほとんど変化は見られない。長屋座敷に建て替えたことに関しては、天保9年（1835）に油業を廃止したことが関係していると推測される³²⁾。

3-2. 建物の変遷のまとめ

小田家の建物の変遷を以下にまとめる。

- a. 小田家屋敷の土地は、元禄5年から江戸末期までの間に4回にわけ拡大して現状に至った。
- b. 先行研究で問題とされた、主屋の建築年については、土地間口購入の記録から元禄14年説の可能性は考えにくく、宝暦3年以降と推定される。
- c. 指図と土地購入の記録を照合した結果、現在の主屋は宝暦3年（1753）に建てられたものと推測される。
- d. 主屋の小屋組架構は国森家住宅とは異なり、創建時から柳井の一般的な登り梁形式で計画されていた。
- e. 西側座敷は宝暦8年の土地購入後から、文化年頃までの間に増築されたが、その後、文政元年（1817）に建て替えられた。
- f. 屋敷は文化年までに飛躍的に拡大し、蔵などの棟の数を増やしていった。文政7年～天保9年にかけて、半閑舎より南の油絞り場と長屋門を取り壊し、油絞り場跡に長屋形式の座敷を建てた。現在の屋敷は、文化・文政頃の屋敷を復元保存している。

結び

本稿を通して、小田家住宅は現在に至る屋敷の拡張と編年も復元可能な、数少ない近世の町家遺構であり、港町柳井の町家の屋敷構成において、その発展を期するのは19世紀に入ってからである。

また、小田家住宅の平面形式は国森家住宅と酷似しており、柳井の町家の典型例とみなして問題ないが、架構形式については登り梁形式を典型とする柳井において、二重梁形式を示す国森家住宅は比類形式と理解すべきであり、むしろ小田家住宅がその典型を示す最古の遺構として位置づけられる。特に、現在の主屋が古図資料より宝暦3年（1753）の建築であることが有力となり、このことから18世紀にはすでに登り梁形式が存在していたことがわかる。ほぼ同時期に建てられ、規模、平面形式に大差のない両町家に、こうした小屋組の相違が見られることから、登り梁形式は18世紀当初の新しい架構技術であったと推測され、その後多くの町家に踏襲されていくこととなる。

〔謝辞〕

本稿は小田家当主の善一郎氏の理解と協力がなければ成しえなかった。また、資料収集に関しては柳井市教育委員会の大岡弘明氏の御協力を戴いた。その他、実測調査に参加して戴いた方々に、この場をかりて深く感謝の意を表するものである。

〔註〕

- 1) 例えば、『日本の民家、第7巻、町家Ⅲ』（鈴木充編、学習研究社、pp. 126-128, 1981）では、西日本における妻入町家の起源を、竹原や柳井を中心に考察し、妻入、平入形式の混在を発達段階を示す町並みと捉えている。
- 2) 谷沢明：『瀬戸内の町並み』、未来社、1991
- 3) 大場氏は、「平入指向の町家形成」（建築史学第37号、pp. 2-40, 2001）において妻入を在来形式とみなし、「近畿の町家と京町家-近世町家の在来形式と新興形式-」（建築史学第38号、pp. 32-70, 2002）では、構造形式から、近畿の町家の共通性を導いている。
- 4) 「平入指向の町家形成」、p. 32
- 5) 瀬戸内地方の町家遺構ではば年代が明らかなものとしては、東広島市の木原家住宅が寛文5年（1665）、竹原市の吉井家住宅が元禄3年（1690）、頼惟清旧宅が安永4年（1775）などがあげられる。
- 6) 『国森家住宅修理工事報告書』（文化財建造物保存協会、1984）によると、国森家住宅は明和5年（1769）の大火後すぐの建築とされ昭和49年（1974）に国

指定重要文化財に指定されている。

- 7) 『柳井市史一通史編』（柳井市史編纂委員会、p. 330, 1988）や、『柳井市伝統的建造物群保存調査報告書』（柳井市教育委員会、p. 28, 1976）において、国森家住宅を柳井の代表的な町家として紹介されている。
- 8) 小田家は柳井津金屋町に元禄元年（1688）から商業を営み、反物、打綿などから油業、土地経営を経て、代々大年寄格を勤めた柳井を代表する商家の一つである。まとめられている。現在、小田家屋敷地には主屋を含め十棟あまりの長家、倉、付属屋があり、これらの建物は当時の多数の生産・生活道具、古文書とともに一括して昭和54年（1979）に県指定有形民俗文化財に指定され、商家博物館「むろやの園」として一般公開されている。
- 9) 『昭和47年民家緊急調査報告-山口県の民家』（山口県教育委員会、1974）に始まり、『山口のすまい』（山口県土木建築部住宅課、1996）や、『やまぐちの住宅』（山口県建築士会、2000）などに掲載されている。
- 10) 江戸中期から現在までの敷地の拡張に伴う変遷を迎えることのできる町家遺構としては、竹原の吉井家住宅が上げられるが、中国地方には他に例がない。
- 11) 第三章の古図の通り、現在でも基礎は残っており、中庭として利用されている。
- 12) 『柳井市史一通史編』、柳井市史編纂委員会、p. 330, 1988
- 13) 『柳井市伝統的建造物群保存調査報告書』（pp. 54-58）参照。
- 14) 『日本の民家、第7巻、町家Ⅲ』（p. 127）には、「屋根は両妻と要所に組まれた地棟が骨格になり、これに桁から登梁を投げ架けて支える」のを柳井の町家の小屋組とし、関西や西日本の土蔵の構造からその成立を類推している。しかしながら、『国森家住宅修理工事報告書』（pp. 51-52）も国森家住宅の小屋組を同様の内容で説明されているが、筆者が図面や実測を照合した結果、国森家の小屋組にはここで言う登り梁は用いられていない。柳井近郊の港町においても、『港町・室積-光市室積地区伝統的町並み調査報告』（山口県光市企画調整部、p. 25, 1995）によると、室積最古の熊谷家住宅以降のほとんどの町家は二重梁と登り梁を併用する小屋組架構であるが、年代の遡る町家は必ずしも登り梁形式をとるとはいえない。
- 15) 『柳井市伝統的建造物群保存調査報告書』（柳井市教育委員会、1976, p. 28）によると、古市・金屋の町割の敷地間口は、東西に走る本町通りの南北でその特性が分かれ、北側は基準寸法を用いないのに対し、南側は1丈（10尺）を基準としたようである。
- 16) 根継ぎがされている東側柱は、平成13年（2001）3月24日の芸予地震により損傷を受けたため、同年12月に取り替えられた。
- 17) 『柳井市古市金屋伝統的建造物群保存地区見直し調査報告書』（柳井市教育委員会、pp. 77-109, 2001.3）には、古市・金屋地区の町家遺構の調査がされているが、国森家住宅のような二重梁形式をもつ遺構は他に類をもたず、江戸期の遺構については登り梁形式が多く用いられたようである。
- 18) 筆者は、古市・金屋伝建地区内の本町通り沿いに建つ町家（51棟）の間口の調査を行い、妻入で創建が明治以前とされるもの（『柳井市伝統的建造物群保存調査報告書』、p. 32, 図8参照）15棟の間口は最大4間半で3間から3間半が最も多い。
- 19) 大場修：「龍野旧城下町における町家の発展過程と町並みの構成に関する一考察」、日本建築学会計画系論文報告集、第376号、1987.6、pp. 137-149
- 20) 室積は柳井と同様、二階に物置を設ける例が多く見られるが、『港町・室積-光市室積地区伝統的町並み調査報告』（山口県光市企画調整部、p. 25, 1997）では、宮本雅明は登り梁形式を「二階の有効利用に伴って発達した形式」と推測している。
- 21) 『山口県の民家』、山口県教育委員会、p. 12, 1974
- 22) 現在、当時の棟札は紛失している。
- 23) 小田家文書『覚』 元文3年（1738）『限り有御触控』。また、寛延3年（1750）にも、同様に「宝暦二年申十一月一日吉日居宅普請御願書差出ス但 十二月一日暮時組頭より叶申候通申参候」と、普請願に関する記録が残されている。
- 24) 小山氏は、『柳井市伝統的建造物群保存調査報告書』（p. 28）で、鈴木とともに執筆した際、小田家住宅の創建年代を宝暦3年（1753）と推測し、「柳井小田家住宅の創建年代」（山口県文化財第15号、pp. 39-41, 1985）において、その具体的根拠を上げ、確証としている。
- 25) 山口県文書館所蔵、『山口県文書館諸家文書目録1』（山口県文書館、p. 58, 請求番号788, 1995）を解説したもの。
- 26) (1)、(2)の土地区分については絵図資料には描かれていないため本稿での言及はひかえる。
- 27) 『建築技術史の謎を解く-続・工匠たちの知恵と工夫』（西和夫、彰国社、pp. 71-73, 1986）から、基準尺が享保期から明治までの間において、中国地方に1間＝6尺5寸が存在していたことがわかる。
- 28) 玉井哲雄氏は、『講座・日本技術の社会史-第七巻-建築』（日本評論社、pp. 184-185, 1983）で、街路に面して主屋が建てられ、裏側に土蔵、離れなどの付属屋か、または裏長屋などの借家を建てたのを基本的な構成とし、柳井においてもこうした基本構成は踏襲されている。
- 29) 古図の裏に「大殿様御止宿」と記されている。
- 30) 『山口県文書館諸家文書目録1』（p. 2）によると小田家は2代目善四郎宣敬の代（享保19～安永2年）の頃から反物などの商いの他に、蠟、油、髪付油の生産販売に携わるようになり、経営を拡大し始め、文化元年（1804）の時点で、油板場二面木、蠟板場五面木、髪付油板場三面木と、当時の柳井津町一の経営規模を有していた。
- 31) 小田家当主によると、文政元年に西側座敷を建て替えたという言い伝えが残ることからも、建て替えの年代は間違いないものと思われる。
- 32) 『山口県文書館諸家文書目録1』（p. 2）によると、天保元年（1830）に髪付油生産を、天保9年（1838）に油、蠟生産のを中止している。

（2002年7月1日原稿受理、2003年2月19日採用決定）